

「みだれ髪」における愛用語

藤井久代

「みだれ髪」における愛用語をベスト五まであげてみますと、88首中一番多かったのが「春」（七十三回）、二「君」（六十九回）、三「子」（五十四回）、四「神」（四十六回）、五「夜」（四十一回）の順序になりました。これらについて説明を加えていきたいと思えます。

まず、「春」ですが、これは作者を中心とする当時の明星派歌人の慣用したもので、「みだれ髪」と同じ年の明治三十四年四月三日に発行された鉄幹の第四詩歌集「紫」の「薄狂」の髪首中における「春」をみても三十二回使用されていますが、それにしても晶子の七十三回はやはり愛用語というべきものでしょう。それを佐竹壽彦さんの「余剰みだれ髪研究」の解釈を参考にしまして意味の違い

によって分類してみますと、1 一般的意味の季節をあらわしているのが四十五回（春を行く人・宵の春の神・春の暮・春のゆふべ・暮れむの春の宵ごち・春の夜の夢・春雨・春の夜の闇の中・春の宵・春かせ……）2 おもひ・春の子・春の雨・わが春の二十姿・胸くれなゐの春のいのち……）、3 季節の春であると共に人生の春―7回（春罪もつ子・春よ老いな・春夢見姿・春にがき貝多羅葉の名をききて……）4 青春↓恋―八回（春のおもい・聞くる風に春ときめきぬ・春を説くな・いまさらにそは春せまき御胸なり……）、5 季節の春と恋―五回（春雨・春の雲・春はただ盃にこそ・酒のかをりのなつかしき春・花に色なき春になりぬ）6 青年

―一回（片笑もらす春ぞわかき）、以上のよう

に分類できましたが、これらは「晶子歌話」で晶子自身が、「正直に云えば私の歌に由って私の愛情は十分に表現することができ、私の愛情に由って私の歌は俄に進境を開いたのです。」といっているように、鉄幹を中心とする山川登美子と晶子三人に対応する愛情によって作品が育ち、作品によって愛情が育てられた晶子にとって、恋愛至上・恋愛讃美ということは当然のことだったと思えます。また、晶子は「わが歌はわが止みがたき恋に根ざしてかりそめにも恋を離るること無ければ、山川草木を詠ずるにも、おのづからさるかたの心を托せり。」とも述べています。

晶子のロマンチズムにおいては美ということ

が人間の一番大きな生甲斐となり、人を樂しませ喜ばせるのがその言葉の美しさ面白さだということ。だから晶子の歌は牧水や啄木のそれとは違い、美しい恋の歌を自由に、ある時は自分自身を空想の世界へとひきずりこんで歌いあげているのです。また同時に二つの意味をあらわしているということは、晶子をしてサンボリストと呼ばしめている所以でしょう。その言いあらわし方が美しいゆえを用いているという事です。またこれは後の

歌においては、佐藤春夫さんのいわれる變生体の歌、すなわち、作者晶子が別の機会に強く印象づけられて一首の歌ともなるべき管の素材として潜在したものがここにひっそり浮かびだした文字の白日夢のような趣だということ。なじみの深い歌で例をあげますと、金色の小さき鳥の形して銀杏ちるなり夕日の岡に（恋衣所収）古来の本歌取りという手法に似ていますが、これに発展したのだと思われます。

次に「君」という語ですが、これは恋愛の世界において当然でてくるべき語でしょう。

意味によつて区別してみますと、いろいろな事実からしてはつきり対象が鉄幹だとわかるのが十七回（さびしからずや道を説く君・小羊君をのろはしの我れ・ふしてゐませの君・君が歌に袖かみし子・師の君の目を病みませる・嵯峨の君を歌に假せな……）
2 恋人―十一回（君に歌えな山の鶯・しのび足に君を追いゆく・鶯は君が聲よともしきながら・なにとなく君に待たる……）
3 二人称―十三回（さても緑の野にふさふ君・よしなやこの子行くは旅の君・白きをめでし君にやはあらぬ……）この123は、はつきり区別できないのですが、一応この

ように区別してみました。4 特定な人に対しての二人称―九回、道学者へ（高きにのほり君みずや・君さげぶ道のひかりの遠を見ずや・鳩とらへ罪ただしたる高き君たち）、鉄幹の母へ（母なる君を御幕に泣きぬ）、山川登美子へ（君やしら萩われやしる百合・いづれ君ふるさと遠き人の世ぞと）、当時の青年へ（もゆるくちびる君に映らずや）、妙齡をすぎたオールドミスへ（鶯を打たむの袖のさだすぎし君）、舞妓へ（だんだら染の袖ながき

君）最後は恋愛の神キュービッド↓晶子へ（いづこまで君は帰るとゆふべ野にわが袖ひきぬ翅ある童）、5 三人称―十一回（君がうたひとつそめつけぬ・あかつき問ひし君といはれ・瞳のいろをうるませしその君さりて・君が昨日の恋がたり・ちかき清水に歌すする君……）
2 二人称は「あなた」の語に、三人称は「あの方」と解釈できる言葉です。6 第三者的な立場―十八回（桃のつばみに絵たまへ君（桃われに結った美しい里の少女↓うら若い修業中の美僧））（春雨にぬれて君こし草の門よ（わび住居の美女↓恋人である貴公子））（雨みゆるうき葉しら蓮絵師の君に（蓮池のある寺の↓青年画家））……………これらは晶子の物語的発想ともなっています

す。自分の叶えられぬ恋を歌の中に二人の男女を登場させることにより、美しく想像し描いてみたのだと思われます。

次の「子」について、1 少女―十三回（その子二十櫛に流るる黒髪のものおもふ子の額に消えぬ・しばしかの子が髪に吹かざれ・糸にし持つ子の夕を待たむ……）2 自分―二十五回（山の上のまよひの雲にこの子うらなへ・狂ひの子われに焰の翅かるき・君が歌に袖かみし子を誰と知る・真風いきむの恋よこの子よ・君が前に卒春連説くこの子ならず……）
3 若者―七回（おもむきあるかな春罪もつ子・春の川のりあひ舟のわかき子が・憂きは旅の子藤たそがるる……）
4 恋人―二回（人の子にかせしは罪かわががひな・わかきまどひのあやまちとこの子の悔ゆる歌ききますな）、5 明星同人―二回（星の子のあまりによわし袂あげて・歌をかせへその子この子にならうなの）、6 その他―十五回、舞姫や伶人―（夜の舞殿のならば子らよ）、（牛の子を木かげに立たせ絵にうつす）、菓だつてまもない小鳩―（わかき子が乳の香まじる春雨に）、（このあした君があげたるみどり子の）、人―（秋もろし春みじかしをまどひなく説く子ありなば）これらの

「子」についても「春」と同じく当時の明星派歌人の慣用した語で、鉄幹の「紫」においても春と同じく二十二回使用例があります。またこの語は当時の新体詩によく用いられ、「みだれ髪」の母胎ともいわれている「若菜集」の「草枕」の連では——野末をかよふ人の子よ——とか、晶子が参考にしたと思われる泣菫の「暮笛集」にも——うらぶれ泣きし人の子よ——等使用例があります。人間性を強調する意識をもって用いられた語で晶子はこの語をこれらの詩から採用了のでしょう。

また使用例にも見られますが、明星同人の間では、自分達は自我の解放という理想を高くかかげた星の子で、故郷は天上の星の世界であるという意識があり、喜怒哀楽の感情を持つ弱くして強い人間の子と区別して用いているようです。

次の「神」ですが、崇高な絶対的な神として単独に用いているのが十七回（春を行く人神おとしめな・うつくしき命を惜しと神の云ひぬ・神のさだめ命のひびき終のわが世・ひとたびは神よりさらにほひ高き……）、その他、春の神（みだれ箱をかくしわづらふ春の春の神・酔になくをとめに見ませ春の神……）、夜の神（水にねし囁唄の大塚

のひと夜神・今はゆかむさらばと云ひし夜の神の……）等がめだつようです。この語の使用は、晶子のアニミズム即ち、この世の中のすべての物は生きていて、という考え方によるものだろうと思われまます。あらゆる事物にそれを司る神をみるということは、晶子の特徴的な考え方の一つにもあげられます。

それは晶子が自分自身の一番大切な生命というものを今見ている生命のないものにそそぎ込むことであり、逆にいうと、晶子の詩の空想の力は自分の生命の中に生命のない物を吸い入れ、天地萬物みな生きて動き、生きて物語るようになるのです。一面ではロマンチックな詩人の心ともいえましよう。おもしろいのは「神」の使用の中に恋人自身をさしている例が三回あることです。——（夢にせめてせめてと思ひその神に・春のいのちひれふずかをり神もとめよる・消えしともしび神うつくしき）——同じ例が鉄幹の歌にもさらに山川登美子の歌（われにそひて紅梅さける京の山にあしたおりたつ神うつくしき）にもみえますが、これは恋愛至上の彼等の意識では、恋人は神の名にふさわしい存在となったのでしよう。また既にあげた藤村の「若菜集」の「おくれ」にも——恋は吾身の社にて、君は社の

神なれば——別の連では、——河波高く泳ぎ行き、ひとりの神にこがれなむ——にも使用例がでていました。

最後の「夜」については、（夜の帳にささめき盡きし星の今を・血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど・水にねし囁唄の大塚のひと夜神・今はゆかむさらばと云ひし夜の神の・細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな歸る夜の神……）歌の内容そのものが夜に関係あるものが多いし、夜の方が恋の懊悩とか、さまざまな恋のムードがかもしだされ、また別の理由として、一語だから口調がよく、春の夜の夢等と、複合語も作りやすいので使用例が多いのではないかと思われまます。（本学四年）